

東洋のルソー 宮崎八郎と西南戦争

2021年12月11日

西南戦争歴史講座

【はじめに】

今回の講座では、西南戦争における宮崎八郎の立場について考察する。自由民権思想を掲げ西南戦争に身を投じた宮崎八郎とは、日本の近代史においてどのような存在であったか。史料から彼の功績を整理し、後世の評価とあわせて宮崎八郎という人物の再評価を試みる。

【宮崎八郎 略歴】

- ・実名は真郷（まさと）。通称八郎。現在の熊本県荒尾市出身。
- ・嘉永4年（1851）生まれ。宮崎家の次男だが、長男夭折のため嫡男同然に育てられる。
- ・文久2年（1862）、12歳で月田蒙齋の門下に入る。15歳頃、藩校時習館に入学。
- ・明治3年（1870）、20歳で東京遊学（藩費）。当初、国学者・塙敬太郎の門下に入塾。その後、西周のもとで『万国公法』を学ぶ。
- ・明治5年（1872）、22歳。藩費打ち切り。明治6年、征韓論政変に破れた西郷らが下野。
- ・明治7年（1874）、24歳。正月、赤坂喰違の変で嫌疑をかけられ捕縛される（数日後釈放）。2月、佐賀の乱に参加しようとするも間に合わず。4月、台湾出兵に参加するが、病気のため9月に帰国。
※佐賀の乱への参加未遂と台湾出兵は行動だけ見れば矛盾している。当時の八郎に一つの信念があったとすればそれは「大アジア主義」¹であると想定。
- ・明治8年（1875）、25歳。4月、植木学校設立。校長は平川惟一、八郎は教師格。7月、県民会開設の要望のため上京。10月、植木学校閉鎖。
- ・明治9年（1876）、26歳。東京の『評論新聞』にて執筆活動開始。10月、帰郷。神風連の乱が勃発するも八郎は静観。
- ・明治10年（1877）、27歳。2月、西郷隆盛が鹿児島で挙兵（西南戦争勃発）。八郎たちは保田窪神社に集結、川尻で薩軍に合流。2月23日、協同隊結成。隊長は平川、八郎は本営付き。4月6日、八代萩原堤で戦死。

【宮崎八郎と植木学校】

- ・松山守善『松山守善自叙伝』（史料1）
⇒座学だけでなく戦時の稽古をする、「文武両道」の学校。
- ・西南記傳「宮崎八郎傳」（史料2）
⇒松山の記述に加え、「民約論」と「音聲の練習」がある。「音聲の練習」は演説会を想定したものか。

⇒ルソーの『民約論』は「唯一の經典たるが如き觀あり」。中江兆民はルソーの『民約論』のなかで「第2編 立法」の一部のみ翻訳して明治7年10月に出版。八郎が植木学校で教えた自由民権思想はこの部分が大半である可能性が高い。

1. 「君權ハ譲ル当ラズ」(主權は譲り渡すことが出来ないこと)
2. 「君權ハ分ツ当ラズ」(主權は分けることが出来ないこと)
3. 「衆意或ハ錯ルコト有ル乎」(一般意思は誤ることができるか)
4. 「君權ノ分界」(主權の限界)
5. 生殺ノ權 (生死の權利)
6. 国法

⇒各個人が持つ「自由意思(私利)」と全体の「一般意思(衆意)」、それによって生まれる「繩約(契約)」と「君權(主權)」とそれを実行する政府の在り方について言及。

【宮崎八郎と西南戦争】

- ・西南戦争は元々西郷暗殺計画について私学校生らを中心に「今般政府へ尋問」をおこなうためのもので、西郷にとっては「名分のない戦い」であった²。
- ・西郷の挙兵は八郎たちの希望。(史料3) 松山『自叙伝』(史料4) および宮崎「熊本協同隊」(史料5)より、八郎の目的は西郷を旗頭として現政府を倒し、そのあとで自由民権論を推し進めることにあった。
- ・協同隊結成の目的は「専制政府を打破」して「立憲政治を建設せんとする」にある(史料6)。具体的には政府の改造、人民救済、国家独立の基礎を固めること。
- ・しかし、協同隊は薩軍に合流した際、篠原との会話で「大事成るべからず。吾人は、宜しく潔よく快戦し、斃れて後已まんのみ」と落胆する。(史料6)
- ・八郎は「當時已に薩人の騒無知にして教ふべからざるを見」て、薩軍には理念がなく、統率の取れない烏合の衆であると感じていた？(史料5)
- ・しかし、三月三日付の父宛の手紙にはこれからの戦闘に向けての意気込みが見える。家族の心情に配慮したものか。(史料7)
- ・「協同隊舉兵の趣旨」には「別に民權とか自由とかの文字も餘りなく」、八郎は「今日の事は大概是位が丁度よかるふ」と言って西郷に渡した。(史料8)
⇒基本的に、薩軍と道理を同じくしている(自由民権論については明示していない)。だが、「全國人民ト共ニ眞成ノ幸福ヲ保タント欲ス」の部分に『民約論』の思想が見え、協同隊の独自性を示唆する。
- ・協同隊の「軍律」は「農民一揆の軍律の影響の下に作られたもの」³。「協同隊軍律は総じて戦争による民衆の被害を最小限度に止め、敵の兵卒さえも無差別に殺しつくすことがないように、極めて軍事理論上からも理にかなった「民権軍」の軍律としてふさわしいものであった」⁴。(史料9)
⇒他隊において「軍律」が定められた形跡は見られない。「軍律」の制定そのものは協同

隊の理念を反映した特徴のひとつ。また、その内容は戦後の動きも見据えていた可能性。

【後世の評価】

- ▶有馬源内「真郷宮崎君小伝」⁵（史料10）
 - ・構成は大きく分けて ①八郎の前半生 → ②征韓論～佐賀の乱 → ③台湾出兵 → ④県区会の訴え～東京での執筆活動 → ⑤神風連～西南戦争
 - ・植木学校の記述が抜けている。有馬が持つ八郎の印象のなかでは重要な要素ではないのか。有馬が遺したかった八郎の姿は教師やジャーナリストではなく、「真雄君之男」。
- ▶黒龍会本部『西南記伝』（史料11）
 - ・偉大で、覇気があり、親孝行な人物。才気にあふれ、詩が得意であったと記す。
 - ・日本における地方民会の立役者として評価。
- ▶宮崎滔天「余が家庭」⁶（史料12）
 - ・幼少時の滔天にとって「豪傑」「大将」≡八郎。当時は親類だけでなく村中の年長者が八郎を慕っていた。
- ▶徳富蘇峰「宮崎兄弟の思ひ出」⁷（史料13）
 - ・世間を動かした（戦争への道筋を作った）教育者かつジャーナリストとして八郎を評価。
 - ・自由民権論と大アジア主義の二つの柱を持っていたことを詩文から読み解く。
- ▶荒木精之『宮崎八郎』⁸（資料①）
 - ・八郎の革命的な人生はその後の青年たちにとって、一種の憧れとなったと評価。
- ▶上村希美雄『宮崎兄弟伝 日本篇上』⁹（資料②）
 - ・八郎にとって、変革すること＝生きることでありと考察。「反政府」という自己表現の場に西南戦争を選んだ。

【おわりに】

- ・西南戦争における宮崎八郎の立場
 - ＝理念を持つ「協同隊」を組織し、表向きは薩軍と同じ道理の下、薩軍の「道案内（嚮導）」として第一線で戦った。裏では、政府打倒のために西郷を利用していた。
- ・宮崎八郎とは、日本の近代史においてどのような存在であったか
 - ＝熊本における自由民権論の第一人者であり、日本における自由民権運動の立役者のひとり。西南戦争への参加によって、中江兆民と活動の方向性を異にする。「賊軍」の中にあって戦争後の未来を具体的に思い描いていた。
- ・宮崎八郎はどのような人物か。
 - ＝一言でいえば「革命家的参謀」。西南戦争以前は教育・演説・執筆によって周囲に自由民権論を説き、戦中は西郷を表向きの大將として政府打倒を目論んだ。隊内では参謀として活躍し、仲間内では「雄君」「英雄」と呼ばれる。後世には革命的な理念に殉じた人物として、詩と共に語り継がれた。

【参考文献】

- 1 徳富蘇峰「宮崎兄弟の思ひ出」(『祖国 第六卷第四洪 五月號』、まさき會祖国社、1954年)
- 2 猪飼隆明『西南戦争 戦争の大義と動員される民衆』(吉川弘文館、2008年)
- 3 廣島 正「熊本協同隊の軍律について」(『近代熊本』、熊本近代史研究会、2005年)
- 4 前掲 廣島
- 5 『源内・源次断章 補遺』(砂川雄一・砂川淑子、2007年)
- 6 宮崎滔天『三十三年の夢』(岩波書店、1993年、初出は1902年)
- 7 前述1 徳富蘇峰「宮崎兄弟の思ひ出」(『祖国 第六卷第四洪 五月號』、まさき會祖国社、1954年)
- 8 荒木精之『宮崎八郎』(日本談義所、1954年)
- 9 上村希美雄『宮崎兄弟伝 日本篇上』(葦書房、1984年)

【引用資料】

- 松山守善『自叙伝』(日本年鑑社、初出は1933年)
- 宮崎滔天「熊本協同隊 (五)」(『熊本評論』、1908年)
- 『西南紀伝下巻一』(黒龍会本部、1911年)
- 宮崎滔天「熊本協同隊 (四)」(『熊本評論』、1907年)
- 『西南記伝下巻二』(黒龍会本部、1911年)
- 『真郷宮崎君小伝』(砂川雄一・砂川淑子『源内・源次断章 補遺』、2007年)